



ボーイスカウトぐんま

Gunma Council, Scout Association of Japan

(公財)日本ボーイスカウト群馬県連盟 広報誌

2023.10 vol.10



●第25回 世界スカウトジャンボリー 特集号 ●令和5年度 連盟長ほか表敬訪問

群馬県のボーイスカウト
(令和5年8月31日現在)

スカウト数 **524名**

加盟員総数 **890名**



群馬県のマスコット「ぐんまちゃん」
許諾 第28-140729号



Draw your Dream!



派遣隊の日程

- もくじ
- 02 大会概要
- 派遣報告
- 04 入場・設営
～キャンプ生活
- 06 開会式
～場内プログラム
- 08 場外プログラム
～コチャン郡訪問
- 10 カルチャーデイ
～台湾隊と隊交歓
- 12 救仁寺への避難
～閉会式・帰国
- 14 国際サービスチーム
- 16 実行委員長寄稿
- 17 ギャラリー
- 19 連盟長他 表敬訪問
- 20 各章受章者紹介
連載記事

日	派遣隊の行動・主なプログラム
7月29日(土)	県内各地を出発。国立オリンピック記念青少年総合センターへ
7月30日(日)	センターで最後の事前訓練。県連盟・日本連盟の壮行会に参加
7月31日(月)	センターを出発し空港へ。韓国へ上陸
8月1日(火)	韓国・セマングムのジャンボリー会場へ入場、設営
8月2日(水)	設営・サイト整備、開会式
8月3日(木)	場外プログラム(コチャン郡へ)
8月4日(金)	場内プログラム
8月5日(土)	場内プログラム
8月6日(日)	場内プログラム、カルチャーデイ
8月7日(月)	場内プログラム、台湾派遣隊と隊交歓
8月8日(火)	台風接近のため会場から撤収、救仁寺(クインサ)へ避難
8月9日(水)	救仁寺とその周辺市街の観光・文化プログラム
8月10日(木)	救仁寺での文化プログラム
8月11日(金)	ソウルへ移動。閉会式(K-POPスーパーライブ)
8月12日(土)	韓国より帰国。県内各地へ



Hub Name	BaekJe	Silla	Goryeo	Joseon
Sub Camp Name	1 OLYMPIA 2 ERMELUNDEN 3 ARROWE PARK 4 GODOLLO 5 VOGELZENANG	6 MOISSON 8 NIAGARA 9 SUTTON COLDFIELD 10 MT. MAKILING	11 MARATHON 12 FARRAGUT 13 ASAKIRI 14 LILLEHAMMER	15 KANANASKIS 16 SYDNEY 17 MT. SEORAK 18 DRONTEN

- 1. Main Arena
- 2. Hub 1-4
- 3. Parking Lot
- 4. Global Youth Leadership Center
- 5. Shade Facility
- 6. Programme Area (A-C)
- 7. Entry Point 1
- 8. Entry Point 2
- 9. Jamboree Delta(Exhibition)
- Hub Headquarter
- Welcome Centre

8月1日～12日にかけて韓国・セマングムにて開催された第25回世界スカウトジャンボリー(25WSJ)に、群馬県連盟からは日本派遣団第3隊として36名のスカウトと4名の指導者が参加しました。また、国際サービスチーム(IST)として3名、本部員として2名が参加しました。海沿いの会場での野営生活は、連日の猛暑と雨でぬかるむ地面、害虫、まだまだ収まらないコロナ対策など決して楽なものではありませんでしたが、各プログラムや台湾派遣隊との交歓などWSJならではの体験ができました。日程後半では、国内で報道もされたとおり台風接近により会場からの早期撤退と救仁寺への避難を余儀なくされ、変則的なジャンボリーとなりました。

第25回世界スカウトジャンボリーを終えて

群馬県連盟より第25回世界スカウトジャンボリー(25WSJ)に派遣されました全員が無事安全に帰還されましたこと、関係者各位に深く感謝申し上げます。特に群馬派遣隊を引率した岡田隊長をはじめ指導者の皆様には、大会の期間中に発生した熱中症・コロナ感染・インフルエンザの対処、台風接近による緊急の対応など、数多くのトラブルを乗り越えて、大会を乗り切ったことにあらためて感謝申し上げます。

私も今回の25WSJには、高松副理事長とともに本部員として参加しました。会場の過酷な暑さと劣悪な環境下により熱中症で緊急搬送されるスカウトが多く発生していることやトイレなどの衛生面の不備等により、約4,500人のイギリス隊、約1,000人のアメリカ隊が大会4日目に撤退を決定しました。これがきっかけとなり、暑さ対策がとられてきて、飲料水やスポーツドリンクの支給、冷房バスの設置やトイレの清掃なども回数が増え、環境整備が進んでいきました。そんな矢先に台風6号が韓国へ上陸の情報が入り、全員の退避が7日に決まりました。日本派遣団は即、撤収開始。翌8日にはバスで4時間移動し、ソウルから東へ400キロに位置する救仁寺(韓国仏教天台宗の総本山)に到着、日本派遣団約1,500人は施設の各所に分かれて雑魚寝状態で2泊3日を過ごしました。急なことにもかかわらず、お寺や地元の方々の協力により、食料の供給や不便なところは早く改善され、台風も無事に通り過ぎて災害を回避することができました。

危機管理の重要性を身にしみて感じました。おそらく会場にいたら、水没して、どうにもならない状況であったとぞっとします。

今回は快適なキャンプ大会とはいきませんでした。トラブルの経験も苦難を乗り越える力を身につけてスカウトの成長へつながったと期待いたします。WSJの醍醐味は150か国以上、4万人以上のスカウトが一同に会した開会式。会場のスカウト全員がスカウトサインをして「ちかい」を唱和したときは、世界が三指でつながっていると感じる瞬間があり、ちかいとおきての重要性を再認識し、WSJに参加した実感が高まりました。また、ソウルのサッカースタジアムで開催された閉会式でのK-POPコンサートでは、スカウトたちはペンライトをもって、リズムに乗って雰囲気を楽しんでいました。この雰囲気を経験するだけで、これまでの困難の穴埋めができたのではないかと思います。今までに味わったことのない国際交流の体験は、スカウトの今後の活動に役立ち、各自の成長につながっていくものと確信します。

おわりに、次の26WSJはポーランド、バルト海に面した北部の都市グダニスクです。WSJにおいて世界のスカウトとの交流やさまざまな挑戦プログラムなどの貴重な体験をできることを知り、次につなぐ世界へ羽ばたくスカウトがいっぱい出ることを期待いたします。4年後に向けて、ちかいとおきての実践と「そなえをつねに」で日々精進して参りましょう。

公益財団法人日本ボーイスカウト群馬県連盟
理事長 大川由明





8月1日、日本を出国した日本第3隊が配置されたのは、BaekJeハブのErmelundenサブキャンプ（SC）でした。SCの名前は過去のWSJ開催地の地名が付いています。一番海沿いのキャンプサイトで、12日間の野営生活が始まりました。

キャンプ生活のなにげないことが一番の思い出です

少し陽が傾きかけた午後5時、私たちは韓国・セマングムのキャンプ地へと足を踏み入れました。到着するとすぐ設営にとりかかりました。まずテントの下に敷くパレットを並べたのですが、これがとにかくしんどい！ 意外と重いサイズも微妙に違うので並べるのに一苦労でした。その後はパティエントや机をそれぞれ組み立て、気づけば時刻はもう夜の8時になろうとしていました。思えばこの日はなかなか空が、私たちに夜を迎えさせてくれませんでした。地平線に重なる真っ赤な光とそれに照らされ輝く明るい空は、私たちに非日常の高揚を与えるのに十分すぎました。夕食を迎えたのは午後10時をまわったころ。湯煎で戻したソットクソットク、バラバラした何か、それから具のチョイスが謎のサンドイッチ、まさか現地初食事のメニューがこうなるとは誰が予想したでしょう。ハブニングだらけのジャンボリーの開幕を飾るイベントのひとつとなりました。他にもこの日は、翌日のドローンパフォーマンスをカンニングしてしまったり、蚊の駆除に精を尽くしたハンターたちが現れたり、あまりの暑さに椅子で寝る者も現れました。

続いては、キャンプ生活を通しての隊員の感想を紹介します。◆たくさん楽しかったことはあるけれど、

なんだかんだ普段の生活の中でのおしゃべりが一番記憶に残っています。私は海外に行くのは初めてで、たくさんの経験とたくさんの気づきを得ることができたキャンプ生活でした。なかでも、私は特に英語で積極的に交流している班や隊のスカウトを見てすごいなって思ったし憧れました。また、体調を崩して何もできなくなってみんなに助けってもらったことがうれしい反面、申し訳ない気持ちでいっぱいになり苦しかったです。みんなの優しさに触れることができてずっと泣きそうでした。病院から帰ってきて食べた、班員の作った味噌汁が本当においしかったです。◆キャンプ生活は台風のから避難もあり予定より短い8日間となりましたが、短くても自分たちが生活しやすいようにテントサイトに風よけを付けたり、日陰が足りなかったのでタープを付け足したりしました。また、食事の際には食器を洗うときに出てしまう排水の量をできるだけ少なくするために、3つのタライに水を張り、3回に分けて洗うなどの工夫をしました。◆ジャンボリーでの行動には、ある程度の自由さとそれに伴う責任があります。その自由さに甘えないように、そして責任から逃げないように自分を律して行動することが課題だったジャンボリー生活でした。だいぶ短い現地

での生活でしたが、予想よりもはるかに多くの学びや喜び、反省がありました。正直しんどくて投げ出しそうになったことは何度もありましたが、班員や隊のメンバー・指導者のみんなの顔やがんばっている姿を見るたびに、もうちょっとがんばろうと踏み出す勇気が湧いてきました。みんなとの何気ない会話のひとつひとつ、一緒に過ごす時間が本当に幸せだったしずっと続いてほしいなと思っていました。◆ジャンボリーでないと体験できない雰囲気や景色がありました。外国の人とは言葉の壁があったとしても、ボーイスカウトとして活動をしているという共通の話題があります。長期のキャンプ生活や海外の人と話すことはもちろん、行きから帰りのバスまで全てが楽しかったです。

最後に、次回のWSJに参加しようと考えているスカウトもいると思います。WSJは学校では教わらないこと、友達は知らないことを身をもって経験することができる良い機会です。参加して損をするということはありません。ぜひWSJに行ったことのあるリーダーやスカウトにより詳しい思い出話を聞いてみてください。興味のあること、やってみたいことが見つかるかもしれません！ それではまた次のWSJで！

(群馬町第1団・田嶋星都／前橋第7団・砂川拓弥)





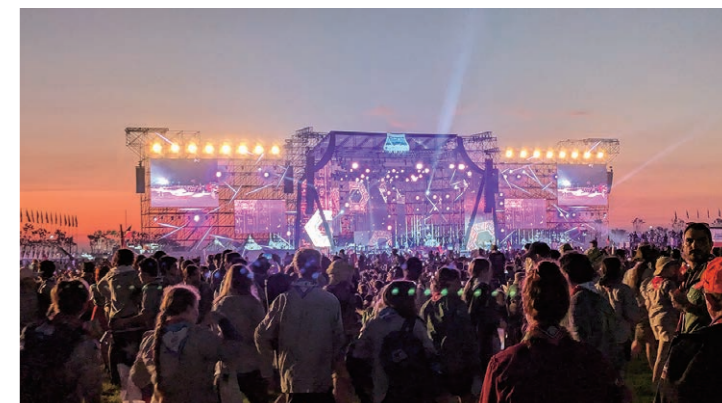
8月2日に開会式が行われました。3日からは“Draw Your Dream!”をテーマに「スカウト精神」「科学」「持続可能性」「伝統・文化」などのプログラムが展開されました。空き時間にはキャンプサイトの改善や交流活動を行いました。

期待に胸を膨らませた開会式。厳しさの中の楽しみ

テントサイトから開会式会場へ向かう道程は、大会の厳しさや楽しさの両面を顕著に表しているようでした。夕方になりサイトから向かおうとすると、他の隊も動き始めていて舗装された道路に出るまでもひと苦労でした。ただ、その時間を無駄に使わないのが外国のスカウトでした。誰が始めるでもなく始まった合唱は各国対抗となり、道を挟んで向かいの隊まで参加していました。しかし私たちは盛り上がりに乗れず、ただその様子を見て楽しむだけでした。日本人の内気で内向的な部分が悔しく、大会期間中にこの殻を破りたいと思いました。やっと道路に出たと思うと歩行者による渋滞で牛の歩みのようでした。すると小林副長が日本国旗を掲げてウェーブを煽りました。3隊から始まったそのウェーブは後ろの隊へ次々と伝播し、生まれたその連帯感を大会を通して感じられたものでした。自分も副長のようにエキサイトメントを作り出せる人になりたいと思いました。空がまだ明るいうちに出発はさすが、会場に着くころにはいつの間にか陽は沈み、暗くなっていました。会場では開会式に集う世界中のスカウト、会場を取り巻く一体感のある雰囲気、ライトアップされたステージ、この空間のすべてに圧倒されました。周囲はすでに夜に包まれていま

すが、会場内は煌々と輝きを放ち「いよいよ世界ジャンボリーが始まるのだ」とそれぞれが期待や不安を胸に参加しました。K-POPアイドルのライブに始まり、尹大統領のスピーチや参加国の紹介が行われ、会場は熱気に包まれていました。特に盛り上がったのは参加国の紹介でした。それぞれ自分の国が呼ばれると「自分たちが最高だ」と言わんばかりの返事で、日本派遣隊も負けじとその熱量に挑戦しました。開会式が終わり帰路についていてもその興奮は冷めず、他国の隊と交流し世界ジャンボリーのその規模を改めて体感し胸を躍らせました。開会式が終わりサイトでの日常が始まると、プログラムが始まりました。会場はとても広く、プログラムを行っているポイントはサイトから離れているため、徒歩での移動は疲れました。しかし道路脇には冷房の効いたバスが設置されていたので、班員全員で束の間の休息をとりました。私たちの班はアーチェリーに参加し、韓国の伝統的な弓矢に挑戦しました。弓矢の扱いやプロテクターの付け方をISTに教えてもらい、離れた的を射てみてなかなか当たらず難しかったです。日本ではできない貴重な経験で、またチャレンジしたいと思いました。他の班は3Dペンや木のクラフトな

ども参加していました。事前に参加したいと話していたプログラムにはすべて行きたいと思っていましたが、強い日差しと気温のせいで軒並み場内プログラムが中止となってしまい、とても残念でした。場内には開会式会場近くにフードハウスと呼ばれる飲食エリアが設けられていました。そこではオーストラリアやギリシャ・台湾・スイスなど多くの国の料理が振る舞われていました。普段は食べることのない伝統料理を仲間とシェアして楽しみました。料理を待っている間にはたくさんの外国の方と交流し、ワッペンやスカーフの交換もすることができました。また、その近くにはスカウトショップもありました。興味本意で並んでみたものの長蛇の列で大変でした。しかし中に入るとクーラーが効いており快適で、キーホルダーやトートバック、目覚まし時計など様々な商品がどれも欲しくなりました。プログラムは中止になってしまったものの、その分交流やイベントに参加することができたのでよかったです。大変なことは数多くあったけれど、開会式での熱狂や交流は一生忘れられない思い出となりました。今度はISTとしてジャンボリーに参加してスカウトを支えてみたいと強く思いました。(高崎第17団・須藤優希)





8月3日は場外プログラムの日でした。キャンプサイトを離れ、コチャン郡を訪れました。韓国の文化財の見学をしたり、楽器の演奏をしたり、民族衣装を着る体験したり……。歴史と伝統文化を学ぶことができました。

案外難しかった演奏体験。交流の楽しさを発見

大会3日目の8月3日、私たちは場外プログラムへ出かけました。場所はジャンボリー会場のセマングムから南に少し下ったコチャン郡にある、コチャン邑城跡です。朝、私たちはガイドさんの付き添いのもとバスでコチャン郡へ向かいました。まだ9時ごろで45分ほどのバスの旅でしたが、みんな疲れ果てていたのでバス内の記憶がある人はたぶんいないでしょう。バスが会場に入るとすぐに巨大な城壁と門が目飛び込んできました。

最初のプログラムはチマチョゴリ体験。色とりどりの柄がとてきれいでした。実際に体験した班員は「韓国人になった気分！」と満足げでした。その後は道中の現地の太鼓パフォーマンスを聴きつつ、次のプログラム会場へと移動しました。

次のプログラムは太鼓と鐘の演奏体験でした。会場のお師匠様がたたいたリズムをまねして太鼓をたたきました。最初は簡単なリズムだったからたたけたのに、だんだん難しくなってお師匠様についていくのが大変でぐちゃぐちゃになりました。ですが、現地の伝統に触れられて良い経験になりました。日本とは全然違う文化に触れることができ、とても貴重な経験でした。みんなで楽器を演奏するのってやっぱりいいなあと思

いましたし、私たちが楽しそうにたたくと教えてくださった方もうれしそうにたたいていて、最高の空間でした。みんなでぐるぐる回って「こんなしょうもない時間が一生続けたいのに、ジャンボリー終わらないで」と思いました。その後、私たちと海外隊のスカウト一行は建物の中へと集まってコチャン郡の紹介ビデオを鑑賞し、現地の方から伝統歌謡パフォーマンスなどを披露していただきました。そしてここではもう1つ大きなイベントがありました。それは忘れもしない、唐突に始まった各国隊のパフォーマンス披露です。班員にこのときの様子をきくと、「海外隊の連帯感やノリの良さがすばらしかったです。私たちのパフォーマンスのときは、いきなりでかなり驚いたし恥ずかしさもあったけれど、みんなとの一体感があって楽しかったです」という感想がありました。

少し場所を移動し、休憩スペースで海外隊との交流・スワッピング（持ち寄ったワッペンなどの交換）、制作体験を1時間ほど行いました。

場外プログラムはジャンボリーの中でも特に楽しみにしていたイベントで、貴重な経験をさせてくださった指導者の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。た

だ、交流のときには相手のお気に召さなかったのか、交換をことごとく断られてしまった班員もいました。しかし彼は「次のジャンボリーにも参加して、もっともっといろいろな人と交流したい」と言っていました。

ここでの交流は、私の国際交流に対する考え方になり大きな影響を与えました。正直なところ、私はそれまでなかなか自分から声をかける勇気がなく、交流自体あまり楽しいもののように思えませんでした。ですがこのとき、自分から声をかけて海外スカウトと交流していくうちに「案外楽しいかも」なんて思うこともあって、気づいたときには両手は交換品であふれ、帽子はさまざまな文字のサインで埋まっていた。ジャンボリーに来て良かったなと心の底から思いました。きっとこれから先もあせることのない、私の大切な思い出のひとつです。

この文章を書いている今でも、この1日の思い出がここに書ききれないほど蘇ってきます。朝は死ぬんじゃないかってくらい暑かったな、冷えピタ使いものにならなかったな、屋のジュースおいしかったな、などなど。小さなできごとでもかけがえのない思い出なのです。いつまでも書き続けてしまいそうなのでこの辺で終わりたいと思います。（前橋第7団・砂川拓弥）





世界ジャンボリーの醍醐味といえば、開催国はもちろん参加各国の文化に触られることです。8月6日のカルチャーデーでは縁日をイメージしたコーナーや浴衣で日本文化の「おもてなし」。7日には台湾派遣隊との隊交歓を行いました。



準備に苦労も大盛況のカルチャーデー。台湾隊の温かさ

はじめにカルチャーデーについて紹介します。これは私のジャンボリーに関する思い出の中で、一番思い出深いイベントです。一番楽しかったとともに、かなり苦労した思い出でもあります。カルチャーデーについては、事前訓練キャンプのときから入念な準備を始めました。皆での話し合いの結果、展示のテーマは「神社の縁日」になり、テーマに合わせて展示を企画したり、神社らしくおみくじを考案したりしました。最終的に、日本茶と和菓子・そうめんの試食、折り紙、射的、金魚・ヨーヨー風船すくい、アニメの顔めパネル、浴衣の試着と写真撮影の全部で6つのブースを用意しました。案を考えた後は、現地で使う物の準備。これがとても大変でした。私はフォトスポットの展示を担当したのですが、まず物がない。よくよく考えたら「いかにも日本」なデザインのグッズなんて観光地くらいでしか見たことがない。私は頭を抱えました。通販を駆使してなんとか手配できましたが、本当にギリギリでした。間に合って本当に良かったと思います。そうして迎えた当日、開始当初は時間を過ぎてても人が全然集まらなかったのではどうなるかとハラハラしましたが、愉快的な隊長の宣伝のおかげで1時間過ぎるころには大盛況。私を含めみんなてんやわんや。慣れ

ない英語を使いながらでしたが、展示を無事終えることができました。忙しすぎて他の隊の展示を訪れることができなかったのが残念です。ここで班員からの感想を紹介します。
◆カルチャーデーは第1回の訓練キャンプからずっと準備してきて一番思い入れのあるイベントだったので、無事に成功させることができ良かったです。当日は全てが順調だったわけではないけれど、実際に来てくれた海外のスカウトたちが楽しんでいる様子、そして何より3隊のみんなが笑顔でカルチャーデーをやっているのを見たときが一番うれしかったです。本当に幸せな1日でした。
◆私はお茶・飲食担当でした。外国のスカウトは緑茶が好きで、緑茶がすくなくなってしまう驚きました。自分が作った抹茶をおいしく味わってくれるのがとてもうれしかったです。他の隊の展示にはお茶・飲食コーナーが人気すぎて行けなかったのですが、日本の文化を教えられたのが良かったです。
次に台湾隊との隊交歓について紹介します。台湾の隊でジャンボリー以前から群馬県連盟と交流がある隊があり、せっかくの世界ジャンボリーということで隊交歓をしました。台湾隊のサイトまでの道はとてつ

なく長かったのですが、サイトに着くと台湾隊の皆さんが台湾ならではの夕食を用意してくださり、台湾のスカウトと話しながら食事を楽しむことができました。台湾の料理は、韓国料理と比べて比較的あっさりしているものが多く、おいしかったです。また班員からの感想を紹介します。
◆向こうのサイトに着くと台湾隊の皆さんが温かく出迎えてくださって、いい人たちだなあと感じたのを覚えています。食事会兼交流会だったので、食事を取りながら台湾隊のスカウトと会話をしました。驚いたのが、彼らに「いただきます」みたいな日本語を教えようと思ったら、ほとんど全部知っていたことです。どうやら日本のアニメが有名らしく、その影響で日本語が多少わかる人が多いんだそうです。
最後に、次回の第26回世界スカウトジャンボリーに参加するスカウトへ。ジャンボリーならではの大変なこともたくさんありますが、ジャンボリーに参加することは間違いなくこれからの成長に役立つと思います。これは私が今回参加して強く感じたことです。参加して損することはないので、行くか迷ったらGoすることをおすすめします。次回のジャンボリーでお会いできたらうれしいです。(高崎第18回・渡邊泰月)





台風接近により大会の早期終了が決定し、8月8日、日本派遣団は韓国仏教天台宗の本山「^{クインサ}救仁寺」へ避難。救仁寺では地元政府の協力で文化プログラムが実施されました。ソウルでの閉会式はK-POPライブ。波乱の25WSJが閉幕しました。

避難先の皆様に感謝。派遣隊長としての4か月

8月7日、臨時の隊長会議で大型の台風接近により参加者全員の移動が発表されました（大会本部としては「あくまで会場の変更であり避難ではない」とのことでした）。移動に関する詳細は、その日の夕方に再度開く隊長会議でお知らせするというものでした。明けて8日、移動先は忠清北道丹陽郡、救仁寺という韓国仏教天台宗の総本山でした。そちらに日本派遣団1,600人弱の全員が移動となりました。ソウル近郊へ移動と聞かされていましたが、そこは東京近郊と言われて行ってみたら奥多摩の山奥、そんな感じの場所でした。しかし、そこでの現地のお寺・役所・町の皆さんの対応ぶりには感謝しかありません。9日の観光に添乗して下さった通訳の方の話では、2日前に役所からお寺にWSJ参加者が来るので迎える準備をする旨の伝達があり、日本語通訳の要請もそのときにあったとのこと。事前の計画段階で当然現地への下話しはあったでしょうけど、受け入れのためにあれだけの規模の準備をたった2日間で、並大抵のことではなかったことは想像に難しくありません。こちらでは周辺の町の観光と10日はお寺で伝統舞踊等を鑑賞しました。閉会式はサッカー日韓ワールドカップのメインスタジアムで開催されました。多くのスカウトが待ちに待

ったK-POPのスペシャルライブ！当初中間日の大集会で行われる予定でしたがペンディングとなり閉会式に。会場での彼らののはしゃぎっぷりしたら、もしかしたら彼らが2週間がんばれた最大の功労はこのライブだったかもしれませんね！ここからは結団式から大会を通しての総評を述べたいと思います。昨今のインターネット事情のせいか、場外戦や空中戦によってさまざまなことが言われたジャンボリーでした。実際、初日と2日目のトイレ等のインフラ状況は正直酷いと感じたのも事実ですが、大統領令が発令された3日目以後は見違えるようでした。たとえどんな大会であろうと、彼らにとっても私にとっても「参加」という意味では唯一かけがえのない大会であり、その大会で彼らが何を見、何を感じ学んだかということが重要と考えて活動してきました。3月25日の結団式から本番までの準備期間はわずか4か月間。できるかぎりの準備は行ったつもりでしたが、いざ大会が始まればやり残しも多々あった、そんな4か月間でした。会場は確かに暑かったですが、個人的には日本ほどではないと、帰国後の羽生S A でヒシヒシと実感しました。それでもスカウト諸君にはかなり厳しかったよ

うで、入場3日目に早くも1人、4日目以後は頻りに熱中症の症状を訴えるスカウトが出る状況でした。場内プログラムは班ごとの参加となっていました。中盤戦は班の中に体調の良い者悪い者が混在となったため、参加可能なスカウト同士で臨時の班を編成し場内プログラムに参加することとしました。可能なかぎりの体験の積み重ねは意識しました。またグッズ交換に対する彼らの情熱には並々ならぬものを感じました。本当スゴかった！後半は上記の通り、会場を移動して舎営となりましたが、ある意味こんなに内容の濃い、イベントてんこ盛りの大会はそうそうないでしょう。次回4年後に向けて準備するべきことの1つは、間違いなく体力作りでしょうね！熱中症でプログラムに参加できないなんてもったいないですよ！結団式から半年余り、10月の活動報告会で派遣隊は解散しますが、ご支援いただいた関係各位、そして保護者の皆様、苦勞をともにしてくれた3名の副長諸氏、本当にありがとうございました。参加隊36名のスカウト諸君、君たちのこれからの活躍と未来に弥蒙。第25回世界スカウトジャンボリー日本派遣団 第3隊 隊長 岡田光市



国際サービスチーム (IST) 報告



派遣隊がジャンボリーを全力で楽しめた裏にはスタッフの活躍があります。群馬県連盟からも3人のスカウトがISTスタッフとして派遣されました。ISTはジャンボリーで「ジョブ」にあたるとともに、彼女らもまた生活や交流を楽しみました。

世界との違いと共通点。スタッフからみたジャンボリー

初めての世界ジャンボリーは、暑さや湿気、長時間の移動など大変なことも多かったが、たくさんの海外のスカウトとの交流や英語でのコミュニケーション、海外の文化に生で触れることなど、世界ジャンボリーでしかできないような経験ができた。この報告書では、生活、ジョブ、交流、海外と日本との共通点・相違点、全体を通して感じたことの6つの観点に分けてその経験や感じたことを述べていきたい。

初めに生活について。ジャンボリー会場は、以前から聞いてはいたが本当に日陰が全くなく、日傘をささなければやっていけないほど暑かった。テントの中は、明け方5時ごろは涼しいが日が昇り始めて6時ごろになると暑くなった。昼間のテントの中は蒸し返すような暑さで、10分中いるのも耐えられないほどだった。シャワーは1日に1回もしくは2回浴びることができた。冷水シャワーの冷たさに初めは叫びながら浴びていたが、シャワー後の最高の爽快感を一度覚えると、冷水シャワーも気持ちよく感じるようになっていた。洗濯は、ありがたいことにISTには洗濯機と乾燥機が用意されていたので手洗いはなかった。洗濯機はいつも混んでいて、洗濯機の前に自分の洗濯物を並べることで順番待ちをしていた。

朝食と夕食はスタッフカフェテリアで、昼食は朝食の時に配られてジョブの配属先で食べた。カフェテリアはバイキング形式になっていた。ゼネラルフード(標準の食事)だけでなく、ビーガン・ベジタリアン・グルテンフリー・ハラールも用意されていて世界を感じた。日本で見かけるそういった食事は何かかわるだけのような気がしてしまい現実味を感じることができなかったが、ここでは本当に誰かの生活の一部なのだと感じられた。昼食は、大会本部でも問題になったそうだが、甘いものばかりであり食が進まなかった。バナナはおいしかった。

トイレに関しては、この期間中に人生で一番多くの種類のトイレを経験したというくらいたくさんの種類があったのが印象的だ。決してきれいとは言えないが、エアコンがついていたり優雅な音楽が流れていたりするトイレもあり面白かった。普通のキャンプ生活とも家での生活とも違う、世界ジャンボリーならではの特別な生活を経験することができた。

次にジョブについて。配属先は場内プログラムのサイエンス・クラスだった。日本人が7人と多かったので安心した。と思った矢先、当たり前のことだが、初日から英語での説明、おしゃべりで少しパニック状態

だった。5人グループになり、スカウトを迎えるための準備をした。このころにはだんだん英語にも慣れて楽しく会話できるようになっていた。私たちは、日本人2人・タイ・イギリス・アイルランドのグループで、「シー・グラス・クラフト」という、ガラスの海ゴミから素敵なネックレスを作るブースだった。スカウトが来ると、環境問題についての説明をしたあとみんな実際にネックレスを作った。説明は私も数回したのだが、「英語は上手ではないけれど、聴いてくれるとうれしい」と言ってからつたない英語で説明を始めると、温かいまざしでうなずきながら聴いてくれるスカウトがいてとてもうれしかった。回数を重ねるうちに自分がスムーズに説明できるようになっていくのもうれしかった。インドネシア・ブラジル・メキシコ・韓国・スロベニアなどなど、さまざまな国からのスカウトが来たが、どの国にもにぎやかな子、静かな子がいて、どの国も同じなのだと感じた。

次に交流について。日本ISTのテントサイトは、香港・ドイツ・インド・フランスの近くであり、日常的な歯磨きやシャワーなどのときに交流があった。香港のISTの中にはJ-POPが好きな人や日本に旅行に行ったことがある人がいて話が盛り上がった。日常生活の

中で交流ができた意外な場所は洗濯機のある場所だ。時間を問わず洗濯機のあるスペースにはたくさんの方がいた。待機時には同じように待っている人に声をかけ、たくさんの方と交流した。パリストになるためにオランダに留学に行くというベトナムの男子や、自国が大好きでたくさん素敵な場所を教えてくださいたいイタリアの女の子と楽しく話したのを覚えている。さらに、そこで出会ったチリの女の子とは今でもSNSで連絡を取り合うほど仲良くなった。

ジョブでは交流を深めるためのブレイクタイムがあり、そこでジョブ内のたくさんの方と交流した。これが初めてのしっかりした英語での交流だった。聞き取りやすい英語の人、聞き取るのが難しい英語の人、人によって話す英語はさまざまだった。伝わったかどうかは置いておいて、私も短い文章でジェスチャーも加えながらなんとか話した。ランチタイムはとても良い交流の時間だった。台湾の方と、私が第2外国語で学んでいる中国語で自己紹介したり、台湾の方が学んでいる日本語で簡単な会話をしたりと英語以外での交流もできて、中国語も話せるようになりたいと思った。他の日には、折り紙の鶴を教えたり、ミサンガを教わったり、将来の夢について話したりした。そうやって交流していくうちに、友達のような近い関係になれた気がした。同じグループのアイルランドの子は私と同じ年で同じ医療の道を進んでいるというのもあり仲良くなった。ジョブのあと一緒に夕食を食べに行ったり、会う約束をしてワッペンを交換したりした。帰国の日に空港でも会うことができるととてもうれしかったのを覚えている。

交換品を通しての交流も多かった。私がチーフを交換したのは、香港で指導者やっている女性のISTの方だ。交換した後も会うたびに話をし、2・3度一緒にご飯も食べた。お互い英語は拙かったが、簡単な英語と私の低レベルの中国語と全力のジェスチャーで本当に楽しく会話していた。言語は違っても同じ人間で、スカウトで、仲間なんだ、友達になれるんだ、と強く感じてとてもうれしくなった。もう1つうれしく感じたことは、日本語で「こんにちは」「ありがとう」と言ってくれる人がとてもたくさんいたことだ。それに対し、私はその方々の国の言葉を知らないことが多かったので勉強したいと思った。

海外のISTとの交流だけではなく日本のISTとの交流も楽しめた。キャンプサイトにブルーシートで屋根を作ってくれたので、ジョブが休みの日はその下でみんなとお話をして楽しんだ。ブルーシートの屋根を作るときには、他の県の方がテントの余りのペグやありあわせの物で滞ることなくさっと作り上げていて、ス

カウト技能のレベルの高さに驚くと同時に、今の自分にはできないなと情けなく感じた。これからスキルを磨いていきたいと思った。海外のISTだけでなく日本のISTともほぼ全員初対面だったが、2週間大変な思いや楽しい経験を一緒にしてきたので深い仲間になれた気がする。それがキャンプのいいところだと思う。

次に、海外と日本との共通点だ。共通点は気づきにくかったが、私が少し意外に感じた共通点は、欧米の人もお米をたくさん食べるということだ。偏見だが、お米を食べるのはお寿司のときくらいで白米としてはあまり食べないのかと思っていた。パンがなかったからお米を食べた、という感じかもしれないが。もう1つは、ジョブのところでも書いたがどんな国のスカウトでも元気な子、落ち着いている子がいることだ。これは当たり前のことであるが、今までは言語の壁を感じて、日本のスカウト・海外のスカウトと分けるような感じで考えてしまっていたが、今回のジャンボリーでその壁が取り払われた気がする。ネックレス作りについていけない子に個別で教えたりすると“Thank you”と笑顔で言ってくれてとてもうれしかった。自分の団のスカウトに教えているような気分だった。

続いて、海外と日本との相違点だ。まず、母国語でないにもかかわらずほとんどの人が英語を流ちょうに話していたことだ。日本にも流ちょうに話す人はいるが、海外の方がその人数が多いと感じた。積極性の違いも感じた。ジョブの説明のときに質問する人が毎回10人ほどいた。英語能力の差もあるかもしれないが、たとえ日本語で行っていたとしてもこんなに質問が出ることはないだろう。本当に積極的な人が多いんだなと実感した場面だった。もう1つ感じたことは、海外の若者は日本人よりも何倍も大人っぽく見えることだ。彼らの年齢を聞かされたときに驚いた。そして、私の年齢を伝えると「ほんとに？ 幼く見えるね！」と何度か言われた。

海外の人との違いを見つけることで日本の文化の良さに気づくこともあった。それは、日本人はご飯を残さずきれいに食べることである。海外の人はたくさん取ってたくさん残すという人が多かった。最初に見たときはとても衝撃だった。もったいない!と強く感じた。しかし、これも文化の違いによるものだと思う。

最後に、この大会を通して感じたことだ。今回の大会は改善点も多く、現地のテレビでは批判的な視点で毎日のように報道されていたようだ。確かに試練のように大変なことも多かった。しかし、多くの人の支えを感じられる大会でもあった。韓国の地元の方がボランティアで、私たちが使うトイレを掃除してくれたり、警察・海軍・救急隊が会場やその後の宿泊施設にまで

付き添い、最後まで支援してくれたりした。同じISTの中にもたくさん支えてくれた人がいる。私もお世話になったメディカルチーム、暑い中でも長時間交通整備をしてくれた人、深夜も長い距離を歩いてパトロールしてくれた人。彼ら以外にも、私の知らないところでこの大会を支えてくれた人がたくさんいると思うと感謝の気持ちでいっぱいだ。韓国の市内に出ると、「ジャンボリー大変だね」と声をかけてくれる人が多かったが、本当はテレビに映るような問題点だけではなく、楽しいこともあるし、一生懸命に動いてくれている人もいるんだということも知ってほしいと思った。

感謝したいのはボーイスカウト関係の人だけではない。日本派遣団の突然の宿泊を快く受け入れてくださった救仁寺(クインサ)の方々だ。1500人も突然現れて、コロナやインフルエンザで大変な状況になったにもかかわらず、笑顔で毎日挨拶したり話しかけたりしてくれた。毎日ご飯も提供してくれて、心の広さや温かさを感じた。救仁寺でもう1つ感じたことは、お風呂のことだ。お寺の方は一人ひとりが自分が入った後に床や脱衣所を掃除していた。その行動と心かけに私は感動した。その心かけを見習おうと思った。

別の視点から感じたもう1つの大きなことは、既に書いたこととも被るが、言語の違いは関係ないということだ。大会前は、英語が上手に話せないというディスアドバンテージから、海外の人と比べて自分に劣等感を感じていた。しかし、実際は英語が上手にしゃべれなくてもジェスチャーも使いながら伝えようとがんばれば聴いてくれるし、相手の話す英語を理解しようとがんばればわかりやすい英語に変えて話してくれた。そうやって話していくうちに、もっと話したい・仲良くなりたいという思いが強くなって、その頃には英語は「言語」ではなく「ツール」になっていたように感じる。日常で使う言葉が違うだけで、私たちはみんな仲間なんだと気づいた。そうやっていろんな国の人と友達になるとその国の見方が変わってくることに帰国後に気づいた。ニュースを見ていても前とは違う視点で、より身近なものとして感じるようになった。このように、たくさんの方を感じ、成長できた初めての世界ジャンボリーだった。

以上のように私にとって印象的だったものや感想を書いたが、大会に行っていない方にもその様子が伝わると嬉しい。また、いつか自分で読み返したときに当時の気持ちを思い起こせたらいいなと思う。最後に、他ではできないようなたくさんの経験ができたこの世界ジャンボリーへの参加を支援してくださった、日本連盟・県連盟・地区・団、そして保護者に感謝したい。(高崎第17団・平山希帆)



第25回世界スカウトジャンボリーに参加して

私は、本大会が開催される1年半ほど前から関東ブロック選出の日本連盟の実行委員として、日本派遣団の調整等を行ってまいりました。日本派遣団の構成については、派遣隊35隊、国際サービスチーム（IST）および派遣団本部員総勢1,600名弱の参加となりました。日本派遣団第3隊（群馬隊）においては、スカウト36名、指導者4名の40名体制で標準隊を構成することができました。全国的に見ても標準隊に参加できたのは47都道府県連盟中12都府県のみであり、他の道県連盟は混成隊としての参加となったところ、群馬県連盟は1隊編成できたことに喜びを感じました。群馬県連盟のスカウト人口からすれば、正に快挙であるといっても過言ではありません。私が実行委員として参加していたので、皆さんが協力してくれたおかげであると深く感謝しております。

私は、今回が4回目の世界スカウトジャンボリーの参加になります。本大会においては、日本派遣団第1隊から第8隊の計320名の副分団長としての参加となりました。

さて、開催地である韓国・セマングムについては、実行委員会の中でも当初から、埋め立て地で木立がなく、そして猛烈な暑さであり、環境は非常に厳しい状況であることが話題となっております。その対応について種々議論を重ねてまいりましたが、そのことが現実のものとなりました。

8月2日に現地へ赴くと、想像以上に厳しい状況を目の当たりにしました。まず「暑い」の一言です。大会バスから降車して、ウエルカムセンターで到着手続きを行い、その後日本派遣団本部、そしてキャンプサイトへと行きましたが、派遣団本部から約40分という非常に遠くにあります。毎日この暑さの中この距離を歩かなければならない厳しさを実感しました。また、スタッフ専用の食堂についてもサイトから10分以上かかります。翌日から歩数計で計測すると1日当たり20,000歩以上の歩行を余儀なくされ、暑さも相まって、非常に厳しいものがありました。

また、劣悪な環境から、コロナ、インフルエンザおよび熱中症が続出して、医療機関は大変な状況にもありました。日本派遣団本部には日本人医師2人が常駐しておりましたが、ほとんど睡眠もとれずその対応に追われていました。患者数も日々増加し大会会場の病院で対応しきれず、場外の病院に搬送される事態も発生しておりました。

さらに、追い打ちをかけるように台風6号の直撃が想定されていたことから、避難を余儀なくされました。日本派遣団は韓国政府の取り計らいにより、韓国仏教天台宗の総本山である救仁寺に避難することができ、夜を徹して派遣隊の受け入れを行ったこと。そして、コロナ患者の隔離等その対応に追われましたが、寺において心温まることもありました。それは、ボランティアの炊き出しによる食事の提供でした。本当に皆さんのおかげで、食べ物の心配をすることなく避難生活を送ることができ、感謝の一言に尽きます。その後、閉会式に参加するためソウルの会場へ行き、閉会式開催中に、理由もわからず突如予定していたコースの変更が告げられ、各隊との連絡調整など多岐に渡り精神的にも非常に苦しかったことなどが、今でも思い起こされます。

この大会を振り返って思ったことは、参加費の31万円は私にとって非常に高いと感じておりますが、参加したスカウトはいかがでしょうか。今後、たぶん経験することはないであろうあの過酷な経験をすることができ、それに耐えることができた強い精神力とチームワークなどを養うことができ、また、人として大きく成長できたのではないのでしょうか。そういった視点でとらえるならば、スカウトにとっては、決して高い参加費ではないと私は思っています。この大会の経験を踏まえて、君たちには今後さらなる飛躍を期待したいと思います。

お疲れさまでした。

第25回世界スカウトジャンボリー群馬派遣隊
実行委員長 高松富雄



令和5年度 表敬訪問



山本一太連盟長、安孫子哲県議会議長



令和5年8月24日、富士章・隼章・菊章の各章を受章したスカウトと第25回世界スカウトジャンボリー（25WSJ）に参加したスカウトの代表が、群馬県連盟の連盟長である山本一太群馬県知事と群馬県議会の安孫子哲議長を表敬訪問しました。また、前橋第3団団委員の鈴木数成県議も同席しました。

山本連盟長からは最初に、「非認知能力を発揮できることが大事で、ボーイスカウト活動に通ずる。興味を持って注目している」とのお言葉をいただきました。各章受章スカウトは、これまでのスカウト活動への取り組みと、今後のスカウト活動への抱負を述べました。25WSJ参加スカウトは、楽しかったこと・苦労したこと・勉強になったことなど、韓国への派遣の報告を行いました。県議会のスカウト振興議員連盟に所属されている安孫子議長からは、かつて宿泊参加したジャンボリーでの逸話が披露され、「今後も機会があればぜひ参加し、一緒に活動したい」とのお言葉をいただきました。

富岡賢治高崎市長、清水聖義太田市長、岩井均安中市長

地区・団においても、25WSJの参加報告のため各市長への表敬訪問を行いました。7月13日、高崎地区のスカウトが高崎市の富岡賢治市長のもとを訪れ、支援の御礼と25WSJへの出発を報告。8月23日に太田第5団が太田市の清水聖義市長を、8月25日に高崎第22団が安中市の岩井均市長を、それぞれ表敬訪問しました。



富岡高崎市長と高崎地区のスカウト
〔令和5年7月13日〕



清水太田市長と太田第5団のスカウト・指導者
〔令和5年8月23日〕



岩井安中市長と高崎第22団のスカウト・指導者
〔令和5年8月25日〕

ステップアップおめでとう!

令和5年1月～8月までに履修したスカウトの紹介です。

(敬称略)

富士スカウト



松崎 飛羽

桐生第22団 R5.1.23

●隊長をはじめ多くの方のお力添えをいただき、目標を達成することができました。この感謝と努力を忘れず、今後もスカウト活動に精進したいと思います。



中村 拓巳

前橋第3団 R5.3.25

●「ふとした時にスカウティングについて考える」習慣をつけていたことが、富士章の取得につながりました。今後もスカウトとしての自分を意識していきます。



隼スカウト



萩原 梨聖

高崎第18団 R5.3.25

●隼章取得はこれまで一緒に活動してきた指導者や仲間のおかげです。その経験を今後も生かしていきたいです。

菊スカウト



柄沢 智哉

太田第5団 R5.1.23

菊池 太陽

太田第5団 R5.7.9

根岸 樹里

大泉第5団 R5.7.9

一ノ瀬 太智

太田第5団 R5.1.23

小池 朱麗

太田第5団 R5.7.9

林 古都芭

大泉第5団 R5.7.9

古田 暖人

太田第5団 R5.1.23

菅原 飛鳥

太田第5団 R5.7.9

中村 昌嗣

館林第1団 R5.7.9

原田 智史

太田第5団 R5.7.9

柴田 祈良々

太田第5団 R5.7.9

永桶 蒼馬

前橋第1団 R5.7.9

田嶋 星都

群馬町第1団 R5.7.9

●公益財団法人日本ボーイスカウト群馬県連盟 発足

任意団体の日本ボーイスカウト群馬県連盟と維持母体の公益財団法人群馬県ボーイスカウト振興財団が令和5年4月1日付けで統合し、公益財団法人日本ボーイスカウト群馬県連盟が発足いたしました。

なお、各団・地区のサポートなどの業務は統合前と変わらず行っております。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

維持会員 (寄付者ご芳名) 令和5年4～8月

大川由明 河内正美 高橋宏之
田村忠之 碓井健文 船津保雄
今井健介 林 高行 藤井春俊
國時 武 (順不同・敬称略)

当連盟では、ボーイスカウト活動を通じた青少年の健全な育成に資するため、皆様からの寄付を受け付けております。ご協力をお願い申し上げます。当連盟への寄付は一定の税制優遇があります。

●ボーイスカウト豆知識 008 技能章「救急章」

技能章には 進級課目と連動して取得する9種 (円のふちが赤) と、興味関心に依りて任意に取得可能な74種 (円のふちが緑) があります。

救急章 救急法は傷病者を医師や救急隊に引き継ぐまでの応急処置であり、生命の危険に対する「救命処置」とそれ以外のケガなどに対処する「応急処置」があります。ボーイスカウトではカブスカウト (小3～) から救急に関する項目があり、ボーイ、ベンチャーと上進しても変わらず学習を続け、より深く知識と技術を深めていくことになります。

技能章の救急章では、日本赤十字社や消防の講習会に参加して救命法を学ぶほか、「熱中症」「動植物被害」「搬送方法」など野外活動の技能とつながる項目も学びます。そして班では、安全係や救護係として救急セットの管理や仲間の健康・安全に目を配ることで訓練を積んでいきます。



予定されている大きな行事

令和6年 (2024)

第18回群馬カブラリー

令和7年 (2025)

第31回群馬県野営大会

令和8年 (2026)

第19回日本スカウトジャンボリー

令和9年 (2027) <ポーランド>

第26回世界スカウトジャンボリー

本誌電子版・過去号のダウンロードはこちら



小磯正康法律事務所

弁護士 小磯 正康
弁護士 齋藤 守永

前橋市大友町1-3-2 東和ビル3F ☎ 027-252-8553

造園センター

株式会社

太田造園土木

〒370-0604

群馬県邑楽郡邑楽町石打421-1

☎ 0276-88-5498

全国の処方せん受付



ぶんきょうちようざいやっきょく 文京調剤薬局

〒371-0802 前橋市天川町1667-21 TEL 027(289)3623 FAX 027(289)3624

居酒屋ダイニング



前橋駅の直ぐ近く ～気軽に立ち寄れる焼き鳥屋～

前橋市表町2-22-18 TEL 027-212-8176

17:00～24:00 (LO 23:30) 夜10時以降入店可

銘菓の老舗



たらや

群馬県安中市松井田町松井田282 TEL 027-393-3341 定休日 月曜日 (変更あり)



初心者から上級者まで楽しめるボルダリングジム



クライミングジム Goofee

高崎市八千代町3-9-15
tel.027-368-0419